

**目次**

1. 事務局より
2. 前年度編集責任者より
3. 新編集委員より
4. 本年度編集責任者より
5. 運営・企画担当より
6. 2010年度例会予定
7. 各地の研究会だより
8. 「フランス語研究促進プログラム」による研究について
9. バックナンバーのアーカイブ化について
10. 学会ウェブサイトのリニューアルについて
11. メーリングリスト frenchling からのお知らせ
12. 収支決算報告
13. 編集後記

払ったいただくようにお願いします。

学会誌も業者から発送されることになりましたので、皆さんのお手元に仏文学会の開催後程なく到着したと思います。

本学会は2009年に日本学術会議に申請をして、日本学術会議協力学術研究団体としての指定を受けました。その後、日本学術会議の助言のもとに2010年4月1日に「言語系学会連合」が設立されました。当学会もこの学会連合に参加することになりました。2010-2011年度は、日本言語学会（影山太郎会長）が事務局を担当しています。学会員数に応じて年会費を支払いますが、当学会の年会費は1万円です。この学会連合がどのような活動を行っていくのかはしばらく様子を見ないと分かりませんが、そのことについてはまたニューズレター等でお知らせすることになると思います。（春木仁孝）

**1. 事務局より**

事務局が大阪大学言語文化研究科に置かれて、2年目に入りました。連絡先は変更ありませんが、念のため以下に記しておきます。未だに旧事務局の方に事務局宛の連絡が来ますので、入会希望の方々その他事務局に連絡しようとする方がおられるときには、大阪大学の事務局のアドレスをお伝え願います。

〒560-0043 豊中市待兼山町1-8

大阪大学言語文化研究科フランス語資料室内

日本フランス語学会事務局

e-mail : belfbureau@lang.osaka-u.ac.jp

昨年度のニューズレターにも書きましたが、再び大阪大学言語文化研究科で事務局を引き受けるにあたり、事務局の仕事のやり方に関して大幅な変更を行いました。

まずは春の仏文学会開催時に行っていたシンポジウム会場での、会費の直接徴収と当該年度の『フランス語学研究』の配布を行うためのスタンドを廃止したことです。会費の徴収は基本的に郵便振替で行うことにしましたが、幸い徴収率が大きく落ちることもなく順調に会費が納入されています。このニューズレターに掲載されている会計報告の中に「振込手数料」という名目で22,375円が計上されていますが、この金額のほとんどは学会員による会費の振り込みの際の振り込み手数料を学会が負担していることによるものです。今後とも、会費は『フランス語学研究』に同封します振り込み用紙で速やかに

**2. 前年度編集責任者より**

『フランス語学研究』の編集責任者は、学会誌の編集作業のみならず、編集委員会の準備や招集、司会も担当し、様々な問題を編集委員とメール交換などで協議して解決することも職務とします。いずれも重責ではありますが、今になって振り返ってみると、最も大変だったのは学会誌の原稿集めだったと思います。「論文」「研究ノート」「新刊紹介」など様々なジャンルがありますが、全て投稿が原則です。しかし投稿だけでは十分な原稿が集まらなかった場合、ジャンルによっては適任の執筆者を選定して依頼する、という作業が必要になります。実際、44号でも何人かの皆様に追加の原稿をお願いする機会がありました。ご快諾くださった方々には改めてお礼申し上げます。

今回、44号の編集作業中に、著作物取り扱い規程の制定という大きな動きがありました。『フランス語学研究』バックナンバーの電子アーカイブ化（すべての原稿を電子化し、インターネットを通じて閲覧・ダウンロードできるようにする作業）に必須のもので、会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げる次第です。

また、投稿規程の一部を修正しました。投稿原稿の制限字数にタイトルや氏名を含めるかどうかという点が今まで曖昧でしたので、編集委員会でお諮りした後、「字数に含める」ということを明記しました。また、論文等の注は、完成した冊子では脚注になりますが、投稿の段階

では「後注とする」という点を明記しました。さらに、紙面がより読みやすくなるよう、字体や文字の大きさを微調整しました。

最後に、編集委員を退任される方々について触れておきたいと思います。佐藤正明氏、坂原茂氏、前島和也氏の3名が『フランス語学研究』44号の編集作業の終了をもって、編集委員を退任されます。長い間お疲れさまでした。(喜田浩平)

### 3. 新編集委員より

#### ◆ 武本 雅嗣 (山口大学)

この度はじめて編集委員を務めることになりました。よろしく願いいたします。

私は、機能文法も射程に入れている認知言語学の観点から言語研究を行っています。とりわけ概念と言語現象の連関に関心があります。もう少し具体的に言えば、他の言語と比べてフランス語では認知的な可能性がどういうふうに変現しているのかということに興味を持っています。現在はとくに *converb* に注目し、フランス語のジェロンディフと現在分詞について考察を行っています。

15年前に山口大学に赴任するまでは、関西フランス語研究会に毎回出席していました。私にとっては、先生方のコメントを聞くだけでもたいへん勉強になっていました。山口に来てからは、関西にも東京にもあまり行けなくなっています。近隣にはフランス語学の研究会はありませんが、学内に毎週開かれている英語学研究会があり、そこに私も加わらせてもらっています。英語学の研究者が大半ですが、朝鮮語やドイツ語の専門家もいて、様々な分析方法による発表は互いにいい刺激になっています。

今回編集委員への就任の打診があったとき、私には荷が重く思い一旦お断りしました。しかし、これまで研究発表で先生方からご指導・ご鞭撻をいただいたり、シンポジウムの際委員の方々にいろいろとお世話になったりしてきましたので、私も少しは学会のために働き、学会の発展に貢献しなければと思い、やはり務めさせていただくことにしました。私は所属している学会のなかでも、日本フランス語学会には特別の思いを抱いております。それは、阪神淡路大震災のとき西宮で被災したあと、すぐに学会からたいへん温かいお心遣いを頂戴したからです。それは当時の私にはほんとうにありがたいものでした。以来ずっと感謝の念を持ち続けています。微力ながら、これから委員として学会のため、会員の皆様のために力を尽くす所存です。

#### ◆ 田原 いずみ (明治学院大学)

今年度より編集委員会に加えていただくことになりました。1996年の春にフランス語学会の例会で発表をさせていただいたことがありましたが、その直後から昨年3月まで12年半スイスに在住していたため、フランス語学会にはほぼ何の貢献も出来ませんでした。それにもかかわらず、編集委員会に参加させていただくことになり大変恐縮しています。慣れないことで皆様にはご迷惑をおかけすると思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

大学の卒業論文以来、最も興味を持っているのは時制をはじめとする時の表現です。主に語用論の分野でフランス語の時制や時の副詞を中心にこれまで研究してきました。1996年にスイス、ジュネーヴ大学言語学科に留学したのも、当時、関連性理論をベースにした時の表現に関する研究グループを率いていた J. Moeschler のもとで勉強するためでした。最長2年間のつもりで留学したのですが、研究助手のポストに就くチャンスに恵まれ、結局ジュネーヴで博士論文を提出しました。ジュネーヴ大学では日本語学科で日本語を教えるチャンスにも恵まれました。そして、博士号取得後も、日本語学科の専任講師として日本語を教え続けていました。日本好きのスイス人の学生に日本語を教える毎日はとても充実していました。ジュネーヴ訛りのフランス語に慣れ、夏は山でハイキング、冬はスキーやチーズフォンデュ三昧...というスイスの生活にどっぷり浸っていましたが、“日本でフランス語を教える”という日本を離れた頃の夢はもう実現することはないのかなあと寂しく思うこともありましたが、人生には何が起こるか分かりません。想像もしていなかった時期に日本の大学でフランス語教師をするチャンスが訪れました。住み慣れたジュネーヴを離れ、日本に戻り1年余りが過ぎました。東京での新しい毎日はとても刺激的でしたが、目の前の仕事をこなすので精いっぱい余裕のない年間を過ごしてしまい、そのためフランス語学会の例会などにもほとんど行くことが出来ませんでした。

今年度は、自分の狭い興味の世界に閉じこもらないためにも、フランス語学会のイベントに出来るだけ参加したいと思っています。皆様から多くの刺激を与えていただけることを願っています。フランス語学会の運営に参加させていただくことにより、自分の視野も広げられたらと思っています。

#### ◆ 須藤 佳子 (東京大学)

幼稚園にあがる頃、「落花生」と「南京豆」と「ピー

ナッツ」の違いを得意になって皆に説明してまわっていたそうです。落花生は殻が付いていてね、南京豆は皮が付いていてね、ピーナッツは裸のまんま。幸か不幸か当の本人には全く記憶がないのですが、あれが言葉に惹かれる徴候だったに違いないと家族の者は勝手に思っています。

大学2年生のときにソシュールの『一般言語学講義』を講読するゼミを受けたのが一つのきっかけとなり、フランス語学を専門に選びました。フランス語自体はある意味で偶然選んだのですが、なんとかこの難しい言葉のものにしようと思っていて勉強しているうちに、いつの間にかフランス語に魅了されていました。今でも France Culture から流れてくるレトリックを駆使した美しいフランス語を聞くと気持ちが落ち着きます。

修士論文を終えた後、DEA 論文と博士論文を書くためにフランスに渡り、通算で8年ほどをフランス東部で暮らしました。ほぼフランス語のみを使う生活環境のなかで、論文に専念できた貴重な時間でした。その時以来、語法構文など話者が自らの発言内容に距離を持って発言する現象に興味を持っています。

長く日本を離れていたのもフランス語学会とも縁遠くなっていたうえ、フランス流のゆったりとした時の流れに慣れてしまい研究面でもまだまだ未熟な私ですので、編集委員の一員に迎えていただけることを驚きをもってうけとめております。その反面、尊敬する先輩方のお仲間に加えていただけることがたいへん光栄です。微力ではありますが少しでもフランス語学会に貢献することができれば幸いです。精一杯精進いたしますので、どうか宜しくお願いいたします。

#### 4. 本年度編集責任者より

喜田さんからバトンタッチを受けて本年度編集責任者を担当する小熊です。フランス語学会とは学生時代も含めればかなり古いつきあいになります。1985年-1995年、4年お休みして1999年-現在に至るまで編集委員を勤め、その間多くの研究の生成と発展の現場に立ち会ってきました（もちろん全部理解しているわけではないんですけど）。今回責任者に指名され微力ながら努力しようと思っています。とは言え、この語学会の伝統的雑誌作りは28名の編集委員による共和的な協力関係と日本的気配りによって成り立っていますので、雑誌作りの運営に関してはあまり心配していません。ポカをやらかさないように、という声も聞こえそうですが...

43号以来『フランス語学研究』のレイアウトが変わり、今年は「フランス語研究促進プログラム」の成果も『論

文集』として刊行され、新たにバックナンバーの電子アーカイブ化や長年続けてきた『海外雑誌論文目録』を廃止しHP上での文献案内の充実する、などの提案もなされてきています。労力対効果を考えつつ、情報発信が時代の要請に沿い、会員の意欲を推進するよう調整を続けていきたいと考えています。1年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。（小熊和郎）

#### 5. 運営・企画担当より

「運営の仕事は大変だぞ」と、かつて運営を担当されたある先生から脅されていましたが、いったい何が大変なのやら、今になってもさっぱり分からずにいます。運営はとても楽しい仕事です。その中でも、目玉は何と言ってもシンポジウムです。私が世界で最も尊敬する研究者である野矢茂樹先生と、私が世界で最も心の支えにする研究者である西村義樹先生をお招きすることができ、興奮のあまり、遠足を控えた子供のように寝付けない日々が続きました。私が住む三つの世界の間に、大きな橋がかかりました。「こんなに立派な橋がかかったよ!」と、みんなに自慢したい気持ちです。

説教じみたことは言いたくありませんが、なんだか最近、若い研究者に元気がないような気がしています。欲がないと言うか、変に物分かりがいいと言うか、目立つのを避けていると言うか、権威におびえていると言うか。そこで、この機会に、最も年齢の若い編集委員から、若い皆さんにメッセージを送りたいと思います。

「あなたのやっていることはフランス語の研究ではない」と、かつてある先生から対話を打ち切るような強い調子で言われました。「私の人生を賭けた研究に対して、この先生はどうしてこんなことを言うのだろう」と、寝ても覚めても、考え続けました。どん底に沈みながら考えるうちに、私の哲学の中で、言語論と他者論が合流しました。そうだ、この先生と私は、互いに「意味の他者」なんだ。そうして実現できたのが上記のシンポジウム「フランス語学と意味の他者」です。人を傷つける言葉も、そこから逃げずに悩んで悩んで悩みぬけば、立派な橋ができるきっかけになるのです。

私はフランス語が大好きで、たとえ無給でも続けたいと思えるほど、フランス語を教える仕事が好きです。風邪で調子が悪い日でも、悩み事があるときでも、教壇に立てば元気が出ます。前期14コマ後期15コマの非常勤をしていると、「大変ですね」と同情されることがあります。しかし、自分の好きな仕事で食べていけるのは、幸せなことです。同情される日が来るとしたら、それはこの仕事をやめなければならないときです。この幸せを手

放したくない、この仕事をやめたくない、という思いが、上記の先生の言葉に正面から立ち向かう原動力となりました。

人生も、世界も、確かにつらいことばかりです。「どうしてこんなことが起きなければならないのだろう。」無意味な問いだと知りつつ、思わずそう問いたくなる悲しい出来事が起き、そのたびに無力感に苛まれます。しかし、ただでさえつらい人生を、自分の手で余計つらくすることはありません。権威におびえて人の言いなりになる人生が幸せか、苦しみを立派な橋に変える人生が幸せか、考えどころです。フランス語を取り巻く状況が厳しいと言われて、ただ悲観的になる人生が幸せか、状況を見極めつつ橋をかける方法を最後の瞬間まで探し求める人生が幸せか、考えどころです。

私の母校の創設者（高額紙幣の人です）が言っています。「独立の気概がない者は、必ず人に頼ることになる。人に頼る者は、必ずその人を恐れることになる。人を恐れる者は、必ずその人間にへつらうようになる。常に人を恐れ、へつらう者は、だんだんとそれに慣れ、面の皮だけがどんどんと厚くなり、恥じるべきことを恥じず、論じるべきことを論じず、人を見ればただ卑屈になるばかりとなる。」（『学問のすすめ』（ちくま新書）p. 41）

橋の設計者は、他の誰でもなく、皆さん自身です。他人の権威に頼ってはなりません。さもなければ、その権威ある他人と共に、自分も滅びることになります。

独立の気概を持った若い皆さんの手で、色とりどりの個性的な橋がたくさんかけられるのを楽しみにしています。そして、橋をかけたら、遠慮せずに、「こんなに立派な橋がかかったよ!」とみんなに自慢してください。例会はそんな皆さんの自慢の場の一つです。（酒井 智宏）

## 6. 2010年度例会予定

日本フランス語学会では、毎年4月から12月まで（8月を除く）月一回、原則として第4土曜日に例会を開いています。一回の例会では通常二人の方が研究発表を行いません。

ただし、5月例会は東京で開かれる日本フランス語フランス文学会と同時開催です。また、11月の例会は京都で開かれます。

例会案内はこのホームページによる他、メーリングリスト frenchling でも流しています。

例会はフランス語学会の会員以外の方でも、自由に来聴することができます。入場も無料です。来聴を歓迎します。時間は原則として午後3時から6時です。

会場：慶應義塾大学三田キャンパス

アクセス:

JR 山手線/JR 京浜東北線 田町駅下車 徒歩約8分  
都営地下鉄浅草線/都営地下鉄三田線 三田駅下車  
徒歩約7分

都営地下鉄大江戸線 赤羽橋駅下車 徒歩約8分

〔 下記アドレスををご覧ください :  
<http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html> 〕

第263回例会 5月28日(金) 15:00-17:00

会場：東京大学駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3

塩田 明子（慶應義塾大学非常勤）

「未来時制について」（仮題）

司会：佐野 敦至（福島大学）

※5月例会は、日本フランス語フランス文学会と同時期に開催され、会場も通常とは異なります。

第264回例会 6月26日(土) 15:00-18:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス 第1校舎3階 131-B 教室

(1) 守田 貴弘（東京大学グローバル COE 特任研究員）

「移動表現の類型論と言語学的課題」（仮題）

(2) 安齋 有紀（青山学院大学非常勤）

「自然対話における談話標識の出現と発話機能」（仮題）

司会：渡邊 淳也（筑波大学）

第265回例会 7月18日(日) 15:00-18:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス、教室未定

(1) 古賀 健太郎（東京外国語大学大学院）

「発表題目未定」

(2) 伊藤 達也（名古屋外国語大学）

「courir について」（仮題）

第266回例会 9月25日(土) 15:00-18:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス、教室未定

(1) 山本 大地（京都産業大学非常勤）

「特殊な形容詞 fichu, foutu, maudit, satané, sacré 等について」（仮題）

(2) 本間 幸代（パリ第10大学博士課程修了）

「発表題目未定」

第267回例会 10月23日(土) 15:00-18:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス、教室未定

(1) 東郷 雄二（京都大学）

「フランス語の時制と視点をめぐって - «Je te l'avais

bien dit.」(仮題)

(2) もう一人の発表者未定

第268回例会 11月14日(日)[予定]

会場:未定

(1) 出口 優木(京都大学大学院)

「発表題目未定」

(2) 山田 博志(筑波大学)

「代名動詞受動用法にみる叙述のタイプ」(仮題)

※11月例会は京都で開催されます。

第269回例会 12月4日(土) 15:00-18:00

会場:慶應義塾大学三田キャンパス, 教室未定

(1) 春木 仁孝(大阪大学)

「再帰構文受動用法の意味解釈について」(仮題)

(2) もう一人の発表者未定

## 7. 各地の研究会だより

### ◆フランス言語学をいっしょに勉強する会

この回は1993年に始まり、毎月1回、3時から6時まで研究会を開いてきましたが、発表者や参加者の減少に対処するために、昨年度から前期1回、後期1回の年2回に縮小するという抜本的な変更を迫られることになりました。

昨年度は次の2件の発表がありました。

7月11日: 安齋有紀(青山学院大学非常勤)「話し言葉分析の方法とコーパスについて—自然対話で使われる標識"tu vois", "tu sais"の考察より」

10月17日: 岸 彩子(青山学院大学非常勤)「非自立的出来事文と主語相当定名詞句 La voiture qui s'approche! の文について」

現在のところ今年度の開催日、発表者は未定ですが、前期は7月開催を予定しています。開催の詳細が決まりましたら、メーリングリスト frenchling に開催日の2週間前位にその詳細をお知らせします。

勉強会での発表を希望する方は、世話人の前島和也 <kazuyax@econ.keio.ac.jp> まで御連絡下さい。論文や著書の紹介・論評なども歓迎いたします。

案内はメーリングリスト Frenchling でのみ行い、郵送による通知は行っておりません。Frenchling に加入しておられない方は世話人のアドレスにお知らせいただければ、個人宛にメールでご案内します。(前島和也)

### ◆関西フランス語研究会

関西大学を会場に、関西の大学院生と教員が中心にな

って研究会を開いています。昨年は2回しか開けませんでした。月の後半の土曜日に1回行うことを原則としています。時間は、原則として、午後2時から5時です。昨年度の発表は以下の通りです。

6月

曾我祐典「知覚動詞entendreのふたつの構文」

7月

東郷雄二「談話的観点から見るフランス語時制—単純過去と半過去をめぐって」

この研究会の趣旨は、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために、あるいはまた、関東で発表を終えた人が関西でそれを聞けなかった人のリクエストにこたえてというように、形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、最近の研究発表が中心ですが、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎しますので、発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。アットホームな雰囲気の集まりですので学生の方も遠慮せずにどんどん発表してください。

案内はメーリングリストFrenchlingでのみ行っていますが、加入されていない方は世話人までアドレスをお知らせいただければ、個別にメールでご案内いたします。

平塚徹: hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲: tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(平塚 徹)

## 8. 「フランス語研究促進プログラム」による研究について

『フランス語学研究』44号別冊として、日本フランス語学会研究促進プログラム第1回目の『言葉で/を遊ぶ』をテーマとする論集が刊行される運びとなりました。企画発足から世話人に万事を委ねて戴いた編集委員の方々へ改めて御礼申し上げます。

研究促進プログラムの企画が編集委員会で話題に上がったのは2005年頃で、フランス語学研究促進のため若手・中堅研究者を中心とする研究グループを作り、論考としてまとめられる場合は『フランス語学研究』の別冊として刊行できないか、と云うのがその趣旨であったと記憶します。

2007年頃中尾の発案に川島、前島が応ずる形で「ことばを(で)遊ぶ」をテーマとする研究を企画することになり、翌2008年春には編集委員会での許可を得て第一回目のプログラムがスタートしました。呼びかけに応じた10数名の参加者が事前に各自の研究計画を読み合った上で、師走上旬、終日をかけほぼ全員による発表と討議

を行い、さらに2009年春一同が会し、その後の発展を報告しました。以後まとめた論考に数次の修正を加え、当初の予定どおり2年で別冊論集の刊行に至りました。

動詞意味論や名詞限定といった諸問題の他にも未知の坑道が存在する筈だとの展望に立ってはじめての企画でしたが、機会あるごとに意見の交換ができた参加者にとって収穫は少なくなかったのではないかと思います。肝心の成果については会員のみなさまにご判断いただくとし、これを機会に今後多くの研究促進プログラムが続くことを祈る次第です。

(川島浩一郎, 中尾和美, 文責・前島和也)

## 9. バックナンバーの電子アーカイブ化について

日本フランス語学会は、バックナンバーを電子アーカイブ化することを決定しました。紙媒体の印刷物を事務局で保管することが大変な負担になっており、それを軽減するのが第一の目的です。また、電子化したファイルをインターネットを利用して広く一般公開し、フランス語学研究会の普及に役立てることがもう一つの目的です。

新刊号および過去3年分のバックナンバーはインターネット上での閲覧を制限しますが、それ以前のは無料で閲覧およびダウンロードできるようにする予定です。

電子アーカイブ化に先立ち、著作物の権利関係を明確にする必要があります。従いまして、日本フランス語学会は、2010年3月に下記のような「日本フランス語学会著作物取り扱い規程」を定めました。

本規程は『フランス語学研究』45号(2011年)より適用されます。同号およびそれ以降の号に投稿される方は、この規程を了承したものとさせていただきます。

それ以前の、44号(2010年)までに論文等が掲載された方々には、ご自分の著作物にこの規程を遡って適用することをお認めいただきたいと存じます。

過去の著作物にこの規程を遡って適用することにご異議がある場合は、2011年2月末日までに本学会事務局宛に郵便または電子メールでご連絡ください。その際、以下の情報も併せてお願い申し上げます。

(1) お名前

(2) ご連絡先

(3) 論文等の著者名、タイトル、掲載された『フランス語学研究』の号数

はなはだ勝手ではございますが、上記の期日までにご連絡がなかった場合は、「日本フランス語学会著作物取り扱い規程」をご承認くださったものとさせていただきます。ただし、何らかの事情でこのお知らせをご覧になれなかった場合には、上記期限後であっても対応いたします。

## 日本フランス語学会著作物取り扱い規程

2010年3月制定

1. 『フランス語学研究』に掲載された著作物の著作権は、著者に帰属するものとします。
2. 日本フランス語学会は、『フランス語学研究』に掲載された著作物の複製権、電子的な手段による公衆送信権を有するものとします。また、その他の学術的目的で利用する権利も有するものとします。
3. 『フランス語学研究』に掲載された著作物の著者は、『フランス語学研究』に投稿した時点で本規程を了承したものとします。
4. 本規程制定以前の著作物についても、日本フランス語学会は本規程に従って取り扱うことができるものとします。ただし、本規程制定以前に『フランス語学研究』に掲載された著作物の著者から異議の申し立てがあった場合は、双方に不利益が及ばないための解決を協議するものとします。

## 10. 学会ウェブサイトのリニューアルについて

日本フランス語学会のウェブサイトは、1999年の開設以来、東郷雄二氏がボランティアで運営していただきました。10年という長い年月が経過して一区切り付いたこと、技術的な面で様々な問題が生じたこと、などの理由により、東郷氏より新しいウェブサイトの管理体制を確立して欲しい由、依頼を受けました。

そこで、東郷氏に加え、この方面に明るい平塚徹氏と渡邊淳也氏、また学会誌の前編集責任者である井元秀剛氏および現編集責任者の喜田がワーキンググループを立ち上げ、問題に対処することになりました。

約半年間意見交換を続け、新ウェブサイトの運営方針が固まりました。特定の人に負担が集中しないようにするため、例会情報、談話会情報、学会誌の情報などをそれぞれの担当者が適宜更新することを原則とし、そのための枠組みとしてはブログ形式が最適である、というのがその骨子です。(技術的な側面については、平塚氏の文章をご参照ください。)

当面は、平塚氏が中心となって管理を進めてくださる予定ですが、業務をできるだけ分散させて、迅速かつ正確な情報提供を目指す所存です。新しくなったウェブサイトが日本フランス語学会の今後の活動に貢献することを期待しています。

末筆ながら、長年に渡ってウェブサイトを運営してくださいました東郷氏に厚くお礼申し上げます。

(喜田浩平)

## ◆学会の新しいホームページについて

学会の新しいホームページについて書くようにお題を頂いたのですが、最終的に出来上がったものについて説明するよりも、これを作るのに辿ってきた道筋を述べる方が、結局は理解しやすく、また、私の方も書きやすいので、そのようにしたいと思います。以下、技術的な用語をできるだけ使わずに書いていこうと思います。

さて、当初、学会の新しいホームページを、それぞれの業務に携わっている担当者が直接編集する「発生源入力」で運営できるようにすると聞いたときは、今だから告白しますが、「それは無理だ」と思いました。その時点で想定されていた方法は、各担当者がホームページのファイル編集し、それをウェブサーバにアップロードするというものでした。この方法を実行可能にするためのアイデアも出されていましたが、その理屈も理解できたのですが、実際に行った場合にどうなるか想像してみると、様々な問題やトラブルが予想されました。色々と考えた結果、発生源入力を可能にするには、入力方法が簡単であることはもとより、入力のためのシステムが統一されていることが重要だと気がつきました。今回の場合、各担当者のコンピュータ環境がそれぞれ異なっているため、入力のためのシステムの統一が困難でした。

この問題を解消する方法としてブログを利用することを考えました。ブログは、先ず、編集が極めて容易です。一般の人達がブログをどんどん書いて、ホームページが劇的に増加したことにも、その容易さが表れています。そして、ブログなら、各担当者の環境が異なっても、入力のシステムが統一されます。というのは、各担当者は、インターネットブラウザでブログの編集画面にアクセスし、そこで入力を行うからです。

それでも、ブログで学会の情報を発信するのに適したサイトを構築できるかということ、よく分かりませんでした。実際にブログをやってみないとよく分からないので、二つの無料ブログサービスに登録し、少しいじりました。上述したメリットについては確認できたのですが、このような出来合いのブログサービスは、個人の日記を想定していることもあって、学会サイトを構築するには限界があるように思われました。

しかし、サーバにブログソフトをインストールすることにより、ブログで企業のサイトすら構築できるらしいということが、次第に分かってきました。そこで、今度は、ウェブサーバにブログソフトをインストールして、実際に、学会サイトの実験版を作成してみました。この実験により、ブログソフトを用いれば、学会サイトを構築できるという見通しを得ることができました。

もっとも、ブログソフトには制約もあります。最も重要なのは動作環境です。学会の新しいサイトは、今後の運営のために、特定の大学のサーバに設置するのは避けたいと考えており、国立情報学研究所が無料で提供している学協会情報発信サービスを利用することを考えていました。しかし、このサービスで使われているサーバでは、学会サイトを構築し運営していくのに十分なブログソフトは動作しないことが判明しました。そこで有料のレンタルサーバを借りて、そこにブログソフトをインストールすることにしました。レンタルサーバを借りたお陰で、アドレスも、学会のフランス語名の頭文字を用いた <http://www.sjlf.org/> という覚えやすいものにできました。

記事の編集は、各担当者がウェブブラウザでブログの編集画面にアクセスして、ワープロ感覚で行います。これにより、ホームページ作成の負担が一人の人間に集中するのを防ぎ、また、情報を即座にかつ正確に発信することができます。ただし、ウェブサイト全体の運営や管理、各担当者へのインストラクションやサポートなどの業務があります。これはしばらく平塚が勤めます。

ホームページの構成、内容、デザインなどについては、ここで説明するよりも、実際にアクセスして御覧いただく方がよろしいかと思います。なお、旧ホームページのコンテンツは基本的に新ホームページに移動しました。ただし、旧フレンチリング（1996年3月8日～2008年3月）のアーカイブについては、どのようにするかまだ決まっていません。

新ホームページを御覧頂いて、お気づきになった点がありましたら、平塚 ([hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp](mailto:hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp)) まで御連絡頂けると幸いです。（平塚 徹）

## 11. メーリングリスト frenchling からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用してください。利用にあたってはいくつかの注意を守っていただきたいのですが、当メーリングリストはフランス語学会と密接な関係にありますが、フランス語学会を含め、特定の学会員だけを対象とした連絡には使用しないでください。学会員以外にも開かれたオープンな会合や呼びかけにはどんどん利用してください。ただし、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはご遠慮ください。（不適切と思われる投稿に対しては、適宜管理グ

ループから注意喚起を行ってきましたが、出来るだけそのような事をしなくてもいいように皆さんの適切な利用をお願いします。）

なお、以前はフリーメールのアドレスでは登録をお断りしていましたが、現在はフリーメールのアドレスによる登録も受け付けています。また、アドレス変更、あるいは退会の時には旧アドレスの削除は各自でしていただくようお願いしていましたが、今後は管理グループで削除しますので、直接管理グループのアドレスまでご連絡ください。管理グループのアドレスは以下の通りです。

frenchling-owner@yahoooogroups.jp  
(frenchling 管理グループ)

## 12. 2009 年度収支決算報告

(単位 円)

### 収入の部

会費	768,000
機関誌売上金	106,600
広告収入	110,000
預金利息	8,966
その他雑収入	8,000
小計	1,001,566
前年度繰越金	4,405,284
計	5,406,850

### 支出の部

BELF43 号印刷代金	448,392
BELF44 号編集実費	20,000
ニューズレター印刷代金	18,848
発送費・通信費	45,384
特別発表(講演)謝礼	120,000
人件費	164,838
会場費	43,050
事務消耗品費	35,372
振込手数料	22,375
ホームページ管理費	8,430
雑費	0
小計	926,689
次年度繰越金	4,480,161
計	5,406,850

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	714,730
郵便貯金 (普通)	308,381
(振替)	1,450,138

銀行預金 (三井住友銀行定期預金)	2,000,000
現金	6,912
計	4,480,161

2010 年 3 月 31 日

〒 560-0043

大阪府豊中市待兼山町 1-8  
大阪大学大学院言語文化研究科内  
日本フランス語学会

## 13. 編集後記

今回のニューズレターの編集は、どのような企画を出そうかと頭をひねるまでもなく、研究促進プログラム、バックナンバーのアーカイブ化、そして学会ウェブサイトのリニューアルなど、例年になく多くの実務連絡的な記事が積みかさなるうちに、ほどよい字数に達しました。時代の変化がいつそう急激になり、いろいろな面で、フランス語学会もそれに対応せざるを得ない状況にあることを示しているのではないかと思います。

実務的な記事(それはニューズレターの第1の任務ではありますが)が多くなった分、一見、従来のニューズレターにあった、「楽しい読みもの」といった性格が薄れたように思われるかもしれません。しかし、ひとつひとつ読んでみると、「Le style est l'homme même」(Buffon) というように、それぞれの記事に、執筆くださったみなさまの多彩なお人柄がにじみ出ているようにお見受けいたします。おかげさまで、今号を編集する作業も、たいへん楽しいものになりました。

今回も、執筆者のみなさま、そして版下作成や印刷所との連絡の労をとってくださった平塚徹さんのご協力なくしては、ニューズレターを発行にこぎつけることはできませんでした。ここに感謝を申し添えたく存じます。

(渡邊 淳也)

ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページ (<http://www.sjlf.org/>) で読むことができます。